

『鏡物語』とは何なのか？

イルゼアイヒンガーの『鏡物語』について

島浦 一博

一 はじめに

一九四七年の秋に初めての長編小説『もっと大いなる希望』(Die größere Hoffnung)を書き上げたイルゼアイヒンガー (Ilse Aichinger 1921-) は、早速年が明けてすぐに、これまでにないような斬新な短編小説の執筆を始めた。それがこの『鏡物語』(Spiegelgeschichte)である。

この小説はタイトル通り、鏡のモチーフを用いることで時の観念や生き死にの問題に挑んだ意欲作で、短編でありながら完成までに一年半をかけたという。そのことから、この作品に込めた作者の並々ならぬ思いがうかがわれる。そして四年後の一九五二年に開催されたグルツペ四十七(戦後の西ドイツを支えた文字集団)の会合で、アイヒンガーは満を持してこれを朗読し、聴衆の拍手喝采を受けた¹⁾。それはこの作品の質の高さが世に認められた瞬間であった。そのような経緯もあって、『鏡物語』はアイヒンガーの作品の中ではよく知られたものの一つとなり、出された

研究論文も少なくないが、しかしその大半は小説の構造や時間の問題、それにアイヒンガー独得の語り手の問題に終始しているように思える。もちろんそれらは作品を理解するために解き明かされるべき問題ではあるが、しかしアイヒンガーがこの作品を通じてどうしても語りたかったことは、実はその先にあるのではないだろうか。

本稿では、まず『鏡物語』の全文を訳し、そのあと構造や時間、語り手の問題について触れつつも、そもそも『鏡物語』とは何なのかについて考えてみたいと思う。

二 テクストの全訳

鏡物語⁽²⁾

大部屋からあなたのベッドが出される、あなたは天が緑色になるのを目にする、そして副司祭の弔辞はやめてもらいたいと思う。そのときこそ、あなたの起きる時。そうつと、錠戸から漏れ入る朝の光に子供たちが起きるように、ひそかに、看護師に気づかれないうちに。いそいで！

でももう始めてしまいました、副司祭は。ほら、彼の声が聞こえるでしょ、若くて、熱心で、もう止まりません。あなたにもあのスピーチが聞こえるでしょ。やらせておあげなさい。彼の善き言葉が、晴天に降る目に見えない雨の中に消えていくのを見ていなさい。あなたの墓は開いています。彼のとってつけの自信などすぐにぐらついてしまうでしょうが、放っておけばいいのです、どうせ後でぐらつかなくなるのですから。放っておきなさい、そうすればし

まいに、自分が始めたのかどうかも分らなくなります。分からなくなって、棺を運んできた人たちに合図を出してしまつのです。すると運び人たちはたいして訊きもせず、再びあなたの棺を穴から引き上げ、蓋の上のブーケを取つて墓の傍らにうなだれて立つ若者に返します。ブーケを受け取つた若者はどうしてよいかわからずにリボンの皺を一つ一つのばして、一瞬、少しあおむきます。と、雨が彼の頬に涙をばつりばつりと落とします。

やがて葬列は塀に沿つて戻つていきます。小さなみすばらしい礼拝堂のろうそくが再び灯され、副司祭は死者への祈りを捧げます、あなたが生きられるようにと。副司祭は若者と大仰に握手をして、どうしてよいかわからず、お幸せに、と若者に言つてしまいます。副司祭にとつてこれが初めてのお葬式なものですから。その顔は首まで赤く染まります。しかし彼が言い直す前に、若者もいなくなっていました。これ以上何ができるでしょう。嘆き悲しむ人に多幸を祈つてしまつた以上、彼にできることは再び死者を送りかえすことだけです。

その後すぐ、あなたの棺をのせた霊柩車は長い通りを戻つていきます。道路の両側には家が立ち並び、どの窓辺にも黄色い水仙が見えます。ブーケにはこの花を入れないと始まらないので、これは勘弁してください。

子供たちが閉めきつた窓のガラスに顔を押しつけています。雨が降っています、それなのに子供の一人が玄関から飛び出してきて、霊柩車の後部にぶら下がります。しかし振り落とされ、置き去りにされてしまいます。子供は両手を目の上にかざし、怒つて車を見送ります。でもそうでもしなければ、墓地通りに暮らす子供は、いったいどこで飛び跳ねろというのでしょうか。

あなたの車は交差点で信号が緑になるのを待っています。雨が小降りになってきました。雨の滴が車のルーフの上で踊っています。干し草のおいが遠くから漂ってきます。どの道路も浄められたばかりで、天はその御手をすべて

の屋根の上に置いてくれています。あなたの車は礼儀上、少しの間トラムと並んで走ります。すると、路肩にいた小さな男の子二人が自分たちの名譽をかけて賭けを始めます。しかしトラムに賭けた男の子が負けることになるでしょうね。あなたならその子にひとこと言つてやることもできたでしょうが、でも名譽なんかのために棺から出てやる者など、これまでにませんでしたから。

あせらないで。初夏なのです。この時季は朝が夜になるまでまだだいぶ時間がかかります。ちゃんと間に合いますよ。暗くなつて、子供たちがみな路肩から姿を消してしまつ前に、ほらもう車は病院へとハンドルを切りました。同時に、月の光が一筋ボーチに差し込みます。すぐに男たちがぞろぞろと出てきて、車からあなたの棺を降ろします。そして、靈柩車はうれしそうに家路につきます。

彼らはあなたの棺を担いで二つ目のボーチを通り、中庭を抜けて靈安室へと運びます。そこで何ものつていない台が待ち受けています、腰高の傾いた黒い台が。男たちはその上に棺を置くと、再び蓋を開けます。その際に男の一人が悪態をつきます、釘があまりにもきつく打ちつけてあつたからです。なんという徹底ぶりだ、くそいましい！その後すぐ若者もやってきて、ボーケを戻します。さあ、もう時間です。男たちはボーケのリボンを整えて頭のほうに置きます。これで心安らかにいられますね、ボーケもきちんと置かれました。明日までにはこのしおれた花々もみずみずしくなり、さらにぎゅつと閉じてつばみになるでしょう。この夜の間、あなたは一人ぼっちです、両手に十字架を握つて。そして次の日中もたつぷりと休むことができるでしょう。こんなふうに静かに横になっているなんて、この先長い間できなくなるでしょうが。

次の朝、再び若者がやってきます。雨が涙を落としてくれないので、彼は虚空をじつと見つめたまま、指で丸帽子

をくるくる回しています。ところが、男たちが再び棺を板にのせようとすると段になって初めて、彼は顔を両手で覆います。この人、泣いてる。でももうこれ以上、あなたは霊安室に留まってはいただけません。この人はなぜ泣いているの。棺の蓋は今釘で打ちつけられていないので、晴れわたった朝だと分かります。雀たちが愉しげに囀っています。雀たちは知らないのです、死者たちを目覚めさせてはいけないことを。若者は棺の先を歩いていきます、地面に立てられたグラスをまたぐようにして。風は冷たく、戯れて吹きまわります、さながら年端のいかない子供です。

男たちはあなたを建物内に運び入れ、階段を上ります。そしてあなたを抱えあげて棺から出します。あなたのベッドは整えられたばかりです。若者は窓から中庭をじっと見下ろしています、二羽の鳩が交尾の最中で、クークー喉を鳴らしているのです。若者は吐き気がして顔をそむけます。

振り返ると、あなたは再び元のベッドに寝かされています。口元は再び布で覆われ、そのせいであなたは全くの別人に見えます。若者はわっと泣き出し、あなたの上に覆いかぶさります。男たちは若者をそっと連れ出します。どの壁にも「お静かに」と貼つてあるものですから。それに目下、病院はどこも定員をかなりオーバーしているので、死者が予定より早く目を覚ますことは禁じられています。

港から船の汽笛が聞こえてきます。出港、それとも入港の汽笛かしら。誰にそれが分かるでしょう。静かに！お静かに！時が来るまで、死者を目覚めさせないで。死者の眠りは浅いのだから。けれども船の汽笛は鳴り止みません。これじゃあすぐに、男たちはあなたの顔から布を取るしなくなるでしょうね、彼らがそうしなくても。彼らはあなたの体を洗い、服を着替えさせるでしょう、そして一人がいで身をかがめ、あなたの心臓に耳をあてるでしょう、いそいで、あなたがまだ死んでいる間に。もうあまり時間がありません、それもこれも船のせいです。

朝はすでに暗くなり始めています。男たちがあなたの顔を開けると、眼が白く光ります。今となつては、彼らはもう何も言いません、あなたの死顔がおだやかだとは。やれやれ、言葉は彼らの口の中で消えたようです。もう少し待つて。今に彼らは出ていきます。誰も目撃者になりたくありませんからね。目撃者になんかなれば、今日でもなお火刑に処されてしまうもの。

彼らはあなたをひとりきりにしておきます。こつしてひとりきりにされると、あなたは目を開けて緑色の天を見ます。ひとりきりにされると、あなたは呼吸を始めます、喘ぎながら苦しげで深い息を、いかりが下るときのようなガラガラという音をたてて。あなたはこわばつた体を持ち上げ、大声でお母さんに呼びかけます、天は、なんて緑色なの！

「幻覚は次第におさまるわ」あなたの背後で声がします。「断末魔の苦しみの始まりよ！」

ああ、もう！この人たちに何が分かるの。

さあ、行きなさい。今がその時です！みんな呼ばれて出ていきました。彼らが戻ってくる前に、彼らのささやき声が再びうるさくなる前に行くのです。階段を下りて、守衛室の横を通り、夜になる朝を抜けて。鳥たちが夜闇の中で啼いています、まるであなたの痛みが歓呼の声をあげ始めたかのように。家に帰りなさい。そして自分のベッドに体を横たえなさい、ベッドがギシギシ軋もうとも、シートがくしゃくしゃのままであろうとも。これで回復がずっと早まります。そこで三日間だけのたうって緑色の天をたつぷりと飲み、そこで三日間だけ、上の階の女性が運んできてくれるスープを押しつけたら、四日目には飲めるようになります。

そして七日目、安息日である七日目に、あなたは出ていきます。痛みがあなたを追い立てます。道は分かるわね。

最初は左に、それから右、そしてまた左、海へ行くしか使いみちのないようなざびれた港の路地をいくつも渡つて。あの若者が傍にいてくれたらね、でも若者は一緒にいないし、棺の中のほうが、あなたはずっと美しかった。それにひきかえ、今のあなたは痛みで顔をゆがめて、痛みは歓呼の声をあげるのをやめてしまった。しかも額に再び汗まで浮かべて、道中ずっと。ああいやだ、棺の中のほうが、あなたはずっと美しかったのに！

道端の子たちが玉で遊んでいます。あなたはその輪の中へ入っていきます、背中から前に進むような歩き方で、でも、どの子もあなたの子供ではありません。酒場で暮らす老婆のところへ行くこととしているときに、あの子たちの中にあなたの子供がいるなんて、どうしてありえるでしょう。港の人たちはみんな知っています、老婆の酒代がどこから出ているのか。

老婆はすでに戸口に立っています。ドアは開いたままで、老婆の手があなたのほうに伸びてきます。ここはすべてが穢れています。暖炉の脇には黄色い花がいてあります、それはブーケに編み込まれるものと同じ花、またしてもあの花です。しかも老婆ときたら、やけに愛想がいい。しかもこの階段もミシミシ軋みます。しかも行く先々どこへ行っても船の汽笛が鳴っている。しかもあなたは痛みで身を震わせているのに、叫び声をあげてはいけなない。船は汽笛を鳴らすことが許されても、あなたが叫び声をあげることは許されない。老婆に酒代を渡しなさい。お金さえ渡せば、老婆はあなたの口を両手でふさいでいてくれます。たくさん酒を飲んだお蔭で、すっかり冴えていますよ、この老婆は。老婆は生まれてこない者に思いを馳せたりしません。罪のない子供たちは老婆のことを聖人に告げ口しませんし、罪のある子供たちもまた、そんなことはしません。でもあなたは、あなたはそのをするのです！
「私の子供を生き返らせて！」

このようなことを望んだ老婆は、これまでにませんでした。でもあなたは望みます。鏡があなたに力を与えるのです。いくつも小さなシミの出たよく見えない鏡が、あなたに望ませるのです、これまでまだ誰も望んだことがないことを。

「この子を生き返らせて、そうしてくれないなら、あなたの黄色い花をひっくり返すわよ、そうしてくれないなら、あなたの目をくりぬいてやる、そうしてくれないなら、その窓を開けて路地じゅうに叫んでやるわ、町の人々が気づいていることを聞かせてやるの、叫んでやる。」

その言葉に老婆は面食らいます。面食らって、よく見えない鏡の中であなたの望みを叶えます。彼女は自分が何をしているのか分かっていませんが、よく見えない鏡の中でならうまくやれます。不安はひどく大きくなり、痛みはよくやくまた歓呼の声をあげ始めます。あなたは絶叫します、でもそのときには子守唄が聞こえています。眠れ、よい子よ、眠れ。あなたは絶叫します、でもそのときには、鏡に再び突き飛ばされて真つ暗な階段を下りています。鏡はあなたを行かせます、走らせません。あんまりいそいで走らないで。

足元ばかり見ていないで、目を上げたほうがいいですよ、でないと下に下りたとたん、人のいない建設現場の囲いに寄りかかった男性の胸に飛び込んでしまいかもしれませんが、丸帽子をくるくる回している若者の胸に。そのしぐさであなたは彼が誰だか分かります。この前あなたの棺の傍で丸帽子をくるくる回していたあの若者です。またしてもあの若者！ほら、彼が立っています、ずっとそこにいたかのように、板塀に寄りかかって。あなたは彼の胸に飛び込みます。またもや彼の眼に涙はありません、あなたの涙を彼に分けてあげなさい。そして別れを告げなさい、彼と腕を組む前に。彼に別れを告げるのです。彼が忘れても、あなたは忘れないで、最初に別れがあるということを。連

れ立って歩いていく前に、人のいない建設現場を囲む板塀の前で、永遠に別れなければなりません。

その後あなたたちは、あらためて歩き始めます。目の前には一本の道が、貯炭場の脇を抜けて海へと続く道があります。あなたたちは黙り込みます。あなたは最初の言葉を待っているのです、彼に言ってほしいのです、最後の言葉があなたに残らないように。彼は何て言うてくれるかしら。いそいで、海に書く前に、海は人を軽率にさせるから。今何て言ったの。最初の言葉は何で。でもってしまっただけ、目を伏せずにはいられないほど、その言葉は大変なかしら。それとも、あの板塀の向こうにずっと高くそびえる石炭の山が彼の目の下に影を投じて、その黒さに目がくらんでしまったのかしら。最初の言葉は、あ、今言いましたよ、それはある路地の名前。老婆が住んでいる路地の名前です。まさか、そんなことが。妊娠を知るより先に、彼が老婆の名前をあげるなんて、愛していると言っただけ、彼が老婆の名前をあげるなんて、落ち着きなさい。彼はあなたがすでに老婆のところに行ってきたことを知らないのですから。あのことも知らないはずで、彼は鏡のことを全く知らないのですから。もっとも彼は老婆のことを口にしたとたんに、言ったことを忘れてしまいました。鏡の中ではすべてが語られる、そのすべてを忘れるために。妊娠していると口にしたとたん、あなたもまた、口をつぐんでしまいました。鏡はすべてを映します。

石炭の山が背後に遠のくと、そこはもう海です。視線の果てに、白いボートがまるで問いかけるようにいくつも浮かんでいます。黙っていなさい、海はあなたたちの口から答えを取り上げてしまっただけ。ほかに言おうと思っただけがあっても、どうせ呑み込まれてしまっただけ。

それからあなたたちは幾度となく、浜辺を下るかのようになり、家を出るかのようになり、家に帰るかのようになり、家に帰ります。

白いナースキャップをかぶった人たちは、何をひそひそ話しているのかしら。

「これって断末魔の苦しみだわ!」

好きなように言わせておきましょう。

いつの日か、天は十分に蒼ざめるでしょう、輝きだすほどに蒼く。極限まで蒼ざめたその輝き以上に、輝くものなんてあるのでしょうか。

そして天が蒼ざめた日、よく見えない鏡は呪われた家を映します。取り壊される家のことを、人々は呪われた家と呼びます。呪われた、人々はそう呼ぶけれど、それ以上のことはよく知らないのです。あなたたちが驚くようなことではありません。天は今や十分に蒼ざめました。そしてこの蒼ざめた天のように、この家もまた、呪わしさの果てに至福が訪れるのを待っているのです。たくさん笑うと涙が出るのと同じです。あなたは十分に泣きました。ブーケを返してもらいなさい。さあ、もうすぐあなたの三つ編みを再びほどもいい頃がやってきます。すべては鏡の中のことです。そしてあなたたちの行為すべての背後に、緑色の海が広がっています。あなたたちが家を出ると、目の前は海です。崩れ落ちた窓から再び外に出れば、あなたたちはもう忘れていきます。鏡の中ですべてが行われる、そのすべてを赦してもらったために。

それから、彼はあなたを急かして一緒に中に入ります。そして熱く燃える二人はそこを出ますが、もう浜辺のほうには行きません。ふり返りもしません。呪われた家は遠ざかっていきます。河をのぼっていくと、あなたたちの熱があなたたち自身にぶつかってきて、横を流れ去ります。たちまち彼の急ぎ立てる勢いは弱まり、と同時に、あなたの心づもりも消えて、二人はもじもじし始めます。引き潮です、引き潮はすべての海岸から海を引き取ってしまう。河

ですら、引き潮時には水位が下がります。向こう岸では、とうとう梢からこんもりとした若葉が消えてしまいました。その下で、白くなったこけら葺きの屋根が眠っています。

気をつけなさい、そろそろ彼が将来のことを話し始めますよ、子供が欲しいねとか、長生きしたいねとか、興奮して彼の頬は燃え立ち、それがあなたの頬にも飛び火します。あなたたちは男の子がいいか、女の子がいいかでけんかになります、あなたは男の子がいいのですが、彼は瓦の屋根がいいと言い、一方あなたは……。でも、ほらもうかなり上までのぼってきていますよ。あなたたちは凍りつきます。向こう岸にあつたこけら葺きの屋根は消え、見えるのは湿原だけです。じゃあ、ここは？ 道を誤らないように気をつけなさい。あたりは薄暗いから 朝ぼらけみたいに、空が白々としているから。あなたたちの言う将来はもう終わりました。将来は湿地に注ぐ河のほとりの道です。引き返しなさい。

これからどうなるの。

三日後、彼はもうあなたの肩に腕を回せなくなります。さらに三日後、彼はあなたに、名前は、と尋ねます。そしてあなたも彼に尋ねます。今やお互いの名前さえ分からなくなりました。そしてもう尋ねることもしなくなります。でも、そのほうが素敵です。お互いに謎めいた人になったのですから。

さて、やっとあなたたちは肩を並べて、黙って戻ってきます。これから彼がまだ何か尋ねるとしたら、雨が降るかな、と訊くでしょうか。そんなこと分かるはずがないのに。あなたたちはどんどん他人になっていきます。将来の話をしなくなつて、もうずいぶん経ちました。もはや目を合わせることもほとんどなくなりましたが、でもまだ全くの他人になつたわけではありません。待ちなさい、あせらないで。いつの日か、その時がきます。いつの日か、お互い

が全く知らない人になってこそ、あなたは真つ暗な路地の開いた門の前で、彼を愛し始めることができるのです。さあ、今その時がやってきました。

「もう長くはないわ」あなたの後ろの人々が言います。「おしまいね!」

この人たちって、何もわかっていないのね。これからやとすべてが始まるのよ。

あなたが彼を初めて見る日がやってきます。彼もあなたを見ます。初めて、つまり、それきり、ということですよ。二人とも驚かないで。あなたたちは別れを言いあう必要はないのですよ、だってとつくの昔に別れたのだから。すでに別れを済ませたというのは、なんといふことなのでしょう。

すべての果実が再び花になるのが待ち遠しい秋の日は、じきにやってきます、白いもやや影を見ると、すでに秋めいています。足元に伸びる影はまるで破片のようで、それであなたは足を切ってしまうそうです。おつかいで市場にリンゴを買いに来たあなたは、それに躓いて転んでしまいます、期待のあまり、うれしさのあまり転んでしまいます。若い男があなたを助けにやってきます。彼は上着をふわりと肩にひっかけてほえみを浮かべ、丸帽子をくるくる回して、でも何と言葉をかけていいのかわかりません。けれどあなたは消え残る光のなかで、とてもうれしそうです。あなたは彼に礼を言いながら、少し頭をそらします、すると留めてあった三つ編みがはすれて、肩に落ちます。

「あれっ、と彼は声を上げます。「君ってまだ学校に行ってるんだね」

そう言つと彼はくるりとぎびすを返し、口笛でメロディーを吹きながら行ってしまう。これがあなたたちの別れです、もう一度見つめあふことなく、痛みなど全く感じず、これが別れであることも知らず。

そろそろ、あなたは再び幼い弟たちと遊んでもいい頃です。弟たちと一緒に河沿いを、ハンソキの植わった河沿いの道を歩いてもいい頃です。向こう岸にはあの白いけから葺きの屋根が、いつものように梢の間に見えています。将来は何をもたしらしてくれるの。息子ではありません。あなたにもたらされたのは弟たちです。それに風に踊るための三つ編みと、すばやく飛ぶためのボールと。怒らないで、これは将来が持つているもつとも良い物なのですから。そろそろ小学校へ通ってもかまいません。

まだあなたは少し大きすぎるので、中休みには校庭で列になって歩いたり、声をひそめて話したり、顔を赤らめたり、笑うときには手を口元に添えなければなりません。でもあと一年待つて。一年後には再び縄跳びをしたり、塀の上に垂れる小枝をつかもうと、ジャンプしたりしてもかまいませんよ。

外国語をすでにあなたは習っていますが、それを記憶に残しておかないのはとても簡単です。でも母国語はそうはいきません。しゃべることに加えて読み書きまで学ぶのはさらに大変なことですが、しかしもつとも大変なのは、そのすべてを忘れることです。最初の試験の際にはすべて覚えておきなさいと言われたのに、最後には何一つ覚えてはいけなくなるのですから。あなたはそれを乗り越えられますか。十分口をつぐんでいられますか。口を開いてしまわないためには、十分畏れを抱えていることです、そうすればすべてうまく収まります。

あなたは小学生がみなかぶっている青い帽子を再び帽子掛けにかけて、学校を後にします。再び秋が巡ってきました。花がつぼみになったのはもうずいぶん前で、そのつぼみはすでに無になり、無は再び果実に変わりました。あちらこちらに家に帰る小さな子供たちが見えます、あなたと同じように試験を乗り越えた子供たちです。あなたたちはみな、もう何も覚えていません。あなたは家に帰ります、家に着くと、お父さんがあなたの帰りを待ちわびています、

幼い弟たちは声を限りに騒いで、あなたの髪の毛を乱暴にひっぱります。あなたがいると弟たちは静かになり、お父さんはほっとします。

すぐに日の長い夏がやってきます。そしてすぐにあなたのお母さんが亡くなります。あなたはお父さんと二人でお母さんを墓地从ら連れて帰ります。三日間は、お母さんはパチパチと音をたてるろうそくの間で寝ています、あのときあなたと同じように。お母さんが目を覚まさないうちに、ろうそくを吹き消しなさい！ しかしお母さんは蠟のにおいに気づきます。肘をついて体を起こし、小さな声で無駄遣いだわ、と小言をいいます。それから起き上がって服を着替えます。

お母さんが亡くなってよかったですね。これ以上はあなたと幼い弟たちだけでは、頑張れなかったでしょうから。でもこれからはお母さんがいます。これからはお母さんがぜんぶ面倒を見てくれますし、あなたにもつとずつと上手に遊びだつて教えてくれます。とはいえ、十分にうまくやれることなど、けつしてないかもしれません。遊びは簡単なことではありませんからね。でももっとも大変なことは、まだ残っていますよ。

もっとも大変なこと、それは言葉を忘れ、歩き方を忘れ、たどたどしくしゃべり、床を這って進み、ついにはおむつにくるまれることです。もっとも大変なこと、それはべたべた撫でまわされることに耐え、ただ見ているしかできないことです。あせらないで。すぐにすべてがうまく収まります。神は、あなたが十分にか弱くなる日をご存知です。

それはあなたが誕生する日。あなたはここの世に生まれ、目を開き、そして強い光に再び目を閉じます。光があなたの手足を温め、あなたはお日様をあびて動きだします。あなたはここにいて、あなたは生きている。お父さんがあなたの顔を覗き込みます。

「お亡くなりになりました」「あなたの後ろの人たちが言います。」「ご臨終です！」
黙ってしましょ。言わせておけばいいのです。

三 『鏡物語』 についての考察

この作品は、若くして命を落としてしまう少女が、そのいまわの際の夢の中で自分の人生を走馬灯のように振り返るという話である。少々解りづらいこの短編小説を読み解いていくと、主人公の少女の人生は以下のようであったと思われる。貧しい家庭に生まれ、幼くして母親を亡くし、学校に通いながら弟たちの面倒をみている。そんな少女がおつかいに行った際に市場で出会った若者と恋に落ちる。熱烈に愛しあううちに少女は子供を身ごもるが、産むことができずに闇で墮胎手術を受け、それが原因で亡くなってしまふ。彼女の身の上はとても悲惨に思えるが、物語の端々に登場する子供たちの様子からすると、これは特別なことではなくて、この話が書かれた当時はむしろありふれたことであったのかもしれない。

アイヒンガーはそんな少女を主人公に話を展開するのだが、幸せに見捨てられたように見える少女のこの短い人生にも、じっくりとふり返れば、恋愛という輝かしい体験があり、家族との楽しい時間があり、そしてこの世に生を受けたとき、強い光に包まれて両親から惜しみない愛情をたつぷりと注いでもらった記憶があった。アイヒンガーはその光景を、いまわの際の夢として、一つ一つ丁寧に描いていく。幸せな瞬間はほんのわずかだとしても、少女にとつては最上のものであるからだ。アイヒンガーの社会的弱者に寄せる限らない愛情は、彼女の作品すべてに通底するも

のである。この作品を考察していくにあたり、作者のこのような姿勢はしっかりと理解しておきたい。

では、まずこの作品の構造について考察する。『鏡物語』の主人公は、「あなた」(原文では親称の「君」が用いられている)と呼ばれる少女である。少女はいま病院のベッドに横たわり、死線をさまよっている。そのような状況下で彼女は、「自分の人生を鏡に映して」³⁾もう一度体験していく。死から誕生へと時を遡って生き直すのである。物語の冒頭部分 棺が墓穴に納められ、まさにこれから土がかぶせられようとしているシーン から早速、時間の逆流は始まる。もちろん、現実では瀕死の状態にある少女が自分の葬式の場面を「思い出す」ことはできないので、「いまわの際の夢の中」でのことであるが、この設定自体も、物語の構造において大変重要な役割を果たしている。生き直しの作業によって、物語の中に相反する二つの時間の流れが生まれるからだ。一つは、病院のベッドに横たわって死への道を歩んでいる時間であり、もう一つは死から誕生へと、自分の人生を遡っていく時間である。人が鏡に自分の姿を映すとき、映った像は左右が実際とは反転するが、鏡に映る少女の人生もまた、死から誕生に向かって、通常とは逆の流れで時が進行する。人は死という極限状態に直面して初めて、自分の歩んできた人生の全形(全景)をくつきりと認識できるのかもしれない。鏡のモチーフをこのように用いることは、時の流れを過去から未来へと伸びる直線としてのみ捉えることへのアイヒンガーの異議申し立てのようにも思われるが、それについてはここでは立ち入らないことにする。

とはいえ、主人公の少女が発言するのは、ほんのワンシーンにすぎない。それ以外は心の声が短い言葉でときどき文中に現れるだけで、少女に代わって物語を進めるのは、「語り手」である。語り手は饒舌で、「あなた」と呼ぶ少女に絶えず語りかけ、時に命令し、時にアドバイスを与え、時に慰めながら、彼女をその誕生まで導いていく。

では、主人公の少女が誕生まで遡っていく『鏡物語』を主導する語り手とは、いったい何者なのだろうか。この語り手の問題については、見解を発表している研究者は少くないが、まだ最終的な決着はついていないようである。⁴ 代表的なのは、語り手を人間の生死をつかさどる神のような存在だとみなす見解や、実は「あなた（少女）」自身がみずから語りかけ、導いているという見解である。どちらも一理あるように思われるが、しかしもうひとつ決め手に欠けるという印象を受ける。

前者とするには、語り手はあまりに饒舌で感情的すぎるように思われるし、後者だとすると、男の子二人が賭けをしているシーンで、

「あなたならその子にひとこと言ってやることもできたでしょうが、でも名誉なんかのために棺から出てやる者など、これまでにませんでしたから」

という部分も「あなた」自身が語りかけた言葉ということになるが、「これまでになかった」ことをどうして知っているのか、疑問を抱いてしまふ。さらに、恋人である若者が闇の墮胎手術をしてくれる老婆の住所を少女に告げるシーンでも、語り手と「あなた」を同一視することは難しいように思われる。

「最初の言葉は ほら、今言いましたよ、それはある路地の名前、老婆が住んでいる路地の名前です。まさか、そんなことが。（中略）落ち着きなさい。……」（傍点は筆者）

傍点の箇所を語り手のセリフとして読む人もいるかもしれないが、ここは恋人の思いがけない言葉に動揺した少女の心の声と理解するのが妥当であろう。そしてその動揺を見て取った語り手が、少女に落ち着くよう諭すのである。

以上の点から、語り手は神のような超越的存在とまでは言えず、だからといって、「あなた」と同一視することもできない。語り手が「あなた」の一部であることは間違いないが、しかしある意味「あなた」の人生を俯瞰する立場にあるとも言える、それが筆者の見解である。カフカの作品でいえば、『掟の門』(Vor dem Gesetz)に登場する門番が、この語り手のような役割を演じているように思われる。少女と若者が恋に落ちる真つ暗な路地の開いた門など、よく似たモチーフも登場する。しかしこの件についてはさらなる考察が必要であろう。この作品に限らず、アイヒンガーの文学作品を理解するためには、言葉を発しているのは誰であるかを常に意識して読み進めることが大変重要である。長編小説『もつと大いなる希望』においても、語っているのは誰か、容易に決定できない場面がしばしば現れるからである。

ちなみに、人生を辿り直す少女の人生物語の中央部分に描かれるのは、墮胎のシーンである。

「私の子供を生き返らせて!」

このようなことを望んだ老婆は、これまでいませんでした。でもあなたは望みます。鏡があなたに力を与えるのです。いくつもの小さなシミの出たよく見えない鏡が、あなたに望ませるのです、これまでまだ誰も望んだことがないことを。

「この子を生き返らせて、そうしてくれないなら、あんたの黄色い花をひっくり返すわよ、そうしてくれないなら、あなたの目をくりぬいてやる、そうしてくれないなら、その窓を開けて路地じゅうに叫んでやるわ、町みんなが気づいていることを聞かせてやるの、叫んでやる！」

そのとき少女は激しく動揺し、大声をあげる。先にも述べたが、実は少女がはつきりと言葉を発するシーンはここだけである。子供を生き返らせること、それこそが少女の心からの願いだったのだ。やむを得ない事情があつたにせよ、子供を墮ろしたことは彼女の心の大きな傷となつたのであろう。自分の人生を辿り直すとき、彼女は心の底に押し殺していた思いを一気にぶちまける。その迫力に圧され、「よく見えない鏡の中で」老婆は少女の願いを叶えてやるのである。こうして少女は自分の人生を生き直し、自分の人生を全きものにする。それがたとえ鏡の中のことにならずとも。

『鏡物語』 鏡の中の出来事、それは少女の心の真実。鏡の中ではすべてが語られる、そのすべてを忘れるために。鏡の中ではすべてが行われる、そのすべてを赦してもらうために。この鏡はほかの誰のものでもない、彼女だけの鏡なのである。こうして人生の実像と虚像がないまぜになつて心に記憶されることで、人は心安らかに逝けるのだ。どのような人生も、それが短く、不幸としか言いようのない人生であればなおさら、その背後に隠れたまばゆいばかりの光の輝きに目を向ける必要があるのではないだろうか。

四 おわりに

この物語には、鏡によつて反転したモチーフが随所に現れる。冒頭、副司祭がお悔やみを言つべき場面で、お幸せにと口走つてしまふシーンがあるが、「葬式」と「結婚式」は、その形式は鏡に映したように似ていて、しかしその性格は真逆である。頻出する「海」と「天(空)」も同様である。そして物語の最後では少女が死ぬと同時にこの世に生まれるが、「生」と「死」もまた真逆である。このほかにも挙げたらきりがないほど、さまざまな場面で鏡が意識されている。今回は『鏡物語』の内容を中心にしていくつか考察を行ったが、ほかのアイヒンガー作品にもよく登場する鏡のモチーフの働きやその意味についての考察は、また別の機会に譲りたいと思う。

注

- (1) Ilse Aichinger: Der Gefesselte. Werke in 8 Bänden. Hg. von Richard Reichenberger Band 2. Frankfurt am Main 1991, S.109.
- (2) Ilse Aichinger: aa.0., S.63-74.
- (3) Ilse Aichinger: aa.0., S.4.
- (4) Annette Rattmann: Spiegelungen, ein Tanz. Untersuchungen zur Prosa und Lyrik Ilse Aichingers. Königshausen & Neumann, 2001, S.78.

『鏡物語』とは何なのか？ イルゼ アイヒンガーの『鏡物語』について

参考文献

イルゼアイヒンガー（真道杉 田中まり訳）『縛られた男』（同学社）二〇〇一年 一九六頁